

京都府北部に眠る医学史料

——太田典禮および新宮涼庭ゆかりの史料群——

島山奈緒子¹⁾，池内早紀子²⁾¹⁾ 関西医療大学準研究員／立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所客員研究員²⁾ 大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科

2022年7月16日から9月4日まで、ふるさとミュージアム丹後（京都府立丹後郷土資料館）にて「あやしい丹後」という企画展が行われており、そこに3体の経穴人形（「経験模範」として展示）が展示されていた。

奇経と同身寸が記された珍しい物であったため、資料館に問い合わせたところ、太田典禮の生家である太田家ならびに新宮涼庭の生家である新宮家の資料が寄託されており、福知山市などの京都府の北部に医学史料が点在しているとの返答をいただいた。特に太田家の史料は数が多く、800点近く寄託されているとのことであった。そこで12月20日に、太田家史料と福知山市の旧家である桐村家の史料を調査すべく発表者の島山、池内、大形徹（立命館大学立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所教授）、横本めぐみ（立命館大学リサーチオフィス）で現地に赴いた。

太田典禮（1900–1985）は太田リングの開発や優生保護法の成立に尽力したことで名前を知られた医師である。太田家は初代の細見玄秀（1674–1716）以来、与謝野町で続く産科で大地主の家系であり、当主は代々典禮を襲名していた。この典禮は8代目であり本名は武夫である。

京都府立丹後郷土資料館に寄託されている太田家の史料の多くは書物であり、中国医書の和刻本、和本の医学書、江戸時代に翻訳されたオランダ医学の本、明治期の医院経営に係わる書類など多岐に渡る。また、医学以外の分野の本も多数含まれているとのことである。特に5代目の玄洌（りょう）の蔵書印があるものには書き込みが多くあり、太田家の医学の詳細を知ることができるものである。

桐村家は鎌倉時代後期ごろ常陸国より移った武士を祖とする一族である。「いわゆる地方文書のほかに、十六世紀後半から十七世紀初頭にかけて書写された、武術・芸能およびその他教養にかかわる典籍類が、二十七冊伝来して」（福知山市HPより：<https://www.city.fukuchiyama.lg.jp/soshiki/7/1307.html>）おり、全てが京都府指定の文化財である。その中に1本だけ医学書があり、いくつかの書物からの抜き書きによって成っている。特に前半を占める「五輪碑」は、身体観を五輪塔を用いて表した日本独自のもので桐村家が福知山に移ってきた時期に始まったとされている。伝来の比較的明らかな「五輪碑」の存在により、医家以外の人たちにも受けいれられてことがはっきりとした。

最後に、調査に際し細やかに準備と気配りをしていただきました京都府立丹後郷土資料館学芸員の稲穂将士さん、調査を受け入れてくださいました館長の岸岡貴英さん、ご自宅にて史料を閲覧させていただきました桐村家の皆さまに心より感謝を申し上げます。